

第23回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

～研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度～

報告書

2025年10月11日（土）10:00～16:30
日本大学生物資源科学部湘南キャンパス
大講義室 & オンライン開催



EPMEWSE

一般社団法人男女共同参画学協会連絡会

目次

第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムプログラム	1
第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムフライヤー	3
午前の部	4
男第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム 開会挨拶	5
第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム 開催校挨拶	6
第 23 期活動報告 <全体の活動報告>	7
第 23 期活動報告 <ワーキンググループ活動報告>	8
選択的夫婦別姓に関するアンケート結果報告	1 1
午後の部	1 4
来賓挨拶	1 5
趣旨説明	1 6
基調講演	1 7
話題提供	1 8
パネル討論	1 9
男女共同参画学協会連絡会 第 23 期委員長挨拶	2 1
男女共同参画学協会連絡会 第 24 期幹事学会挨拶	2 2
男女共同参画学協会連絡会 第 24 期委員長挨拶	2 3

ポスター発表参加一覧	2 4
シンポジウム写真	2 6
第 23 期男女共同参画学協会連絡会シンポジウム担当・記録	2 9
シンポジウム参加者アンケート回答結果	3 0

第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム 研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度

【日時】 2025 年 10 月 11 日（土）10:00～16:30

【形式】 日本大学生物資源科学部湘南キャンパス 大講義室&オンライン開催

【主催】 一般社団法人男女共同参画学協会連絡会（幹事学会：一般社団法人日本森林学会）

【後援】 一般社団法人日本私立大学連盟、独立行政法人国立女性教育会館、日本大学、
一般社団法人国立大学協会、一般社団法人日本経済団体連合会、
日本学術会議、日本弁護士連合会

【参加費】 個人会員・一般：無料、学協会・大学等：7000 円（不課税）
（ポスター展示は別途 税込 3000 円）

【参加申込】 グーグルフォーム

参加〆切：2025 年 9 月 19 日（金）：連絡会加盟団体、個人会員・名誉会員、
連絡会に非加盟の団体

2025 年 10 月 3 日（金）：一般

※一般の方はオンラインでご参加ください

※会員、団体の資料締め切りは 9 月 19 日（金）

【問い合わせ先】 連絡会 23 期事務局（danjo_office23@djrenrakukai.org）

※保育室のご利用を希望の方は 9 月 19 日までにお問い合わせください。

【趣旨および目的】

一般社団法人男女共同参画学協会連絡会は、これまで毎年の提言・要望活動を通じて、選択的夫婦別姓制度の早期実現を訴えてまいりました。研究者にとって氏名はその業績を示す重要な「看板」であり、結婚による改姓や通称（旧姓）使用が研究活動、職場内での認知、国際的な活動において不利益や制約となっており、とりわけ女性研究者への影響が大きいという現状があります。にもかかわらず、制度的改善は長年にわたり放置されてきました。近年では国連女性差別撤廃委員会が 2024 年 10 月に法改正を勧告したことに加え、経済団体・労働団体からも導入の声が上がり、2025 年には 28 年ぶりに国会で本制度に関する質疑が行われるなど、状況に変化が見られています。

本会はこのたび、選択的夫婦別姓制度に関する理系分野の研究者・技術者の実態把握を目的としたアンケート調査（回答数 7,582 名）を実施し、その結果をもとに、衆議院法務委員会での参考人による意見陳述を行いました。現行制度において現場の研究者・技術者が直面する課題を社会に共有・発信するとともに、制度的課題への理解を広めることを目的に、「研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度」をテーマとしたシンポジウムを開催します。シンポジウムでは調査結果の報告およびパネルディスカッションを通じて、次世代の研究者や技術者が性別にかかわらずその個性と能力を十分に発揮できる研究環境の整備に向けた議論の場とすることを目指します。

■プログラム

【午前の部（10:00～11:30）】

開会挨拶

一般社団法人日本森林学会会長 正木 隆 氏

歓迎の挨拶

日本大学業務執行理事 渡辺 美代子 氏

連絡会活動報告

第 23 期活動報告・WG 活動報告

選択的夫婦別姓に関するアンケート結果報告

第 23 期男女共同参画学協会連絡会代表理事 佐藤 宣子 氏

理事 高山 範理 氏

【昼の部（11:30～13:00）】 ポスターセッション（昼食）

【午後の部（13:00～16:30）】

ご来賓挨拶

前内閣府科学技術・イノベーション推進事務局長 松尾 泰樹 氏

趣旨説明

連絡会第 23 期運営委員会委員長 佐藤 宣子 氏

基調講演 「選択的夫婦別姓制度の実現に向けて一歴史と論点」

夫婦別姓訴訟弁護団弁護士 榊原 富士子 氏

パネル討論登壇者自己紹介（14:20～15:20）

「通称使用を巡る手続き上の負担とそれに伴う精神的負担：海外調査と成果発信の両側面から」

九州大学大学院農学研究院 日本学術振興会特別研究員（PD）加反 真帆 氏

「海外での通称利用に関する困りごと事例紹介」

国立研究開発法人 産業技術総研究所 特別研究員 吉澤 和子 氏

「技術者における夫婦別姓の課題」

パシフィックコンサルタンツ株式会社 飯島 玲子 氏

「旧姓併記のなまぬるさ」

東京大学大気海洋研究所 教授 沖野 郷子 氏

「男性事実婚研究者の生活と意見 ― 2.7%のマイノリティーとして」

国際緑化推進センター技術顧問／森林研究・整備機構 森林総合研究所フェロー

田中 浩 氏

休憩 15:20～15:30

パネル討論（15:30～16:20）

パネリスト：榊原氏、加反氏、吉澤氏、飯島氏、沖野氏、田中氏（ファシリテーター）

閉会挨拶（16:20～16:30）

幹事学会からの挨拶

連絡会第 23 期運営委員会委員長 佐藤 宣子 氏

次期幹事学会からの挨拶

日本数学会 坂内 健一 氏

第23回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

2025

～研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度～

日 時：2025年10月11日（土）10:00～16:30

会 場：日本大学生物資源科学部湘南キャンパス 大講義室 & オンライン開催

参加費：個人会員・一般：無料、学協会・大学・国研等：7,000円

ポスター展示: 3,000円

プログラム

【午前の部（10:00～11:30）】

- ・開会挨拶：正木 隆（日本森林学会 会長）
- ・歓迎の挨拶：渡辺 美代子（日本大学 業務執行理事）
- ・連絡会活動報告：第23期活動報告・WG活動報告
- ・選択的夫婦別姓に関するアンケート結果報告
 - 佐藤 宣子（男女共同参画学協会連絡会・代表理事）・高山範理（理事）

【昼の部（11:30～13:00）】

- ・ポスターセッション（昼食）

【午後の部（13:00～16:30）】

- ・ご来賓挨拶：松尾 泰樹（前内閣府科学技術・イノベーション推進事務局長）
- ・趣旨説明：佐藤 宣子
- ・基調講演「選択的夫婦別姓制度の実現に向けてー歴史と論点」
 - 榊原 富士子（夫婦別姓訴訟弁護団弁護士）
- ・話題提供：
 - 加反 真帆（九州大学農学研究院・日本学術振興会特別研究員）
 - 吉澤 和子（（国研）産業技術総合研究所・特別研究員）
 - 飯島 玲子（パシフィックコンサルタンツ株式会社）
 - 沖野 郷子（東京大学大気海洋研究所・教授）
 - 田中 浩（国際緑化推進センター・技術顧問／
（国研）森林研究・整備機構森林総合研究所・フェロー）
- ・パネル討論（15:30～16:20）
- ・閉会挨拶：佐藤 宣子
- ・次期幹事学会からの挨拶：日本数学会

参加申込み(Google forms)

申込締切：2025年 9月19日（金）：非加盟団体でポスター発表あり

2025年10月 3日（金）：非加盟団体でポスター発表なし/一般参加者

※一般参加者はオンラインでのみご参加いただけます

※学協会加盟団体・個人会員・名誉会員の方はメーリングリスト（Liaison）の通知内のGoogle formsからお申し込みください

<https://forms.gle/uGwQLvabPj8dLp346>



非加盟団体

<https://forms.gle/j8WU8mVcVd9Ztkd89>



一般参加者

主催：一般社団法人 男女共同参画学協会連絡会（幹事学協会：一般社団法人 日本森林学会）

後援：独立行政法人国立女性教育会館、一般社団法人日本私立大学連盟、日本大学、一般社団法人国立大学協会、一般社団法人日本経済団体連合会、日本学術会議、日本弁護士連合会

問い合わせ：連絡会23期事務局（danjo_office23@djrensakukai.org）

保育室：利用希望の方は9月19日（金）までに上記のGoogle forms内からお申し込みください

講演・登壇者紹介

【午前の部】

開会挨拶

男女共同参画学協会連絡会第23期幹事学協会 日本森林学会 会長 正木隆 氏

歓迎の挨拶

日本大学業務執行理事 渡辺 美代子 氏

男女共同参画学協会連絡会活動報告

第23期活動報告・WG活動報告

選択的夫婦別姓に関するアンケート結果報告

第23期男女共同参画学協会連絡会代表理事 佐藤 宣子 氏

理事 高山 範理 氏

第 23 期 男女共同参画学協会連絡会 シンポジウム 開会挨拶

正木 隆 氏

一般社団法人 日本森林学会会長

第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムの開催にあたり、幹事学会を務めている一般社団法人日本森林学会を代表してご挨拶申し上げます。

日本森林学会は、1914（大正 3）年に創立された、森林・林業を総合的に扱う日本で唯一の学会です。森林管理による環境の維持・向上や林産物の供給など、森林の価値や機能に関する研究の発展に努めています。現在、会員数は約 2300 名で、そのうち女性会員は約 530 名（23%）です。

私事で恐縮ですが、私は長年、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所に勤めてきたところ、今年 4 月に近畿大学農学部教授として移籍いたしました。還暦にして新米の大学教員です。そのため、4 月と 9 月に新規採用者研修を受けました。その研修では、全学部の新しい教員の皆さまとランダムにグループを作りました。その中に、ある大学での 8 年間のポストクの後、パーマネントの教員として当学に採用された女性の方がいました。話をうかがうと、その方ご自身はポストク時代、将来への不安よりも研究の楽しさのほうがはるかに上回っていたそうで、たいへんポジティブなお人柄とお見受けしました。一方で、学部→大学院前期→大学院後期→研究職 とステージが進むにしたがって女性比率が大きく下がっていく日本の大学の現状には、強い危機感をいだいておられました。

彼女はポストクの期間中にフランスに長期滞在したことがあったそうですが、そのとき周囲にいた大学院生の全員が女性だったそうです。日本の現状を知る者としては信じられない話ですが、世界ではもうそういう状況も当たり前になってきています。海外では官公庁の高官が博士号を持っていることも普通ですし、博士号を取得することが人よりよい人生を歩む可能性につながっています。日本は立ち遅れていると言わざるを得ません。

現状では、「研究が好き」という動機だけ博士取得を目指す女性は少ないと思います。研究者となった先に明るい人生をイメージできなければ、進学に二の足を踏むのは仕方ないことでしょう（これは男性にも当てはまることだと思います）。博士号を取得することによる輝かしい将来の可能性。その道筋を作ることは、学術に携わる者すべての役割だと思います。男女共同参画学協会連絡会の活動はきわめて重要です。本連絡会に参画するすべての学会・すべての皆さまの力を結集し、日本の学術界の未来に貢献していこうではありませんか。

（シンポジウム 資料集より転載）

第 23 期 男女共同参画学協会連絡会 シンポジウム 開催校挨拶

渡辺 美代子 氏

日本大学 業務執行理事

第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムを後援する日本大学を代表し、ご挨拶申し上げます。本日は日本大学生物資源科学部湘南キャンパスにお越しいただき、本シンポジウムにご参加くださいました皆さまに、心より感謝申し上げます。また、今期の幹事学会を務めておられる一般社団法人日本森林学会の皆さま、さらに長年にわたり男女共同参画学協会連絡会の運営と活動に尽力されてきた皆さまに、深く敬意を表します。今回、本学でこのシンポジウムを開催できることを、大変光栄に存じます。

今回のシンポジウムでは、研究者や技術者にとっての「選択的夫婦別姓制度」が議論のテーマとなっております。本連絡会は理系分野に特化したアンケート調査を実施し、その結果を公表されました。多くの当事者から意見を収集し、社会に発信し、関係機関に提言することは、現代社会において極めて重要な取り組みです。一部の強い意見に頼るのではなく、幅広い人々の声をデータとして集め、エビデンスを構築し、それを社会に広く示しながら見解を表明していくことは、複雑化する社会において今後ますます求められる姿勢だと考えます。本日のシンポジウムにおいては、こうしたエビデンスに基づき、多様な観点から活発な議論が展開されることを期待しております。そして、多くの関係者による深く広い議論が実現することを祈念し、挨拶とさせていただきます。

(シンポジウム 資料集より転載)

第 23 期 男女共同参画学協会連絡会 活動報告概要

<全体の活動報告>

佐藤 宣子 氏

第 23 期男女共同参画学協会連絡会委員長

第 23 期幹事学協会の活動期間は 2024 年 11 月 1 日から次回総会が開催される 2025 年 10 月 8 日まで。日本森林学会の 9 名で務めてきた。

2024 年 12 月 10 日の総会、3 回の運営委員会（オンライン開催）および本日のシンポジウムを開催。

メインの活動である本日のシンポでは 30 年前から課題となっている「研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度」というテーマを選んだ。シンポ開催にあたって、日本私立大学連盟、国立女性教育会館、日本大学、国立大学協会、日本経済団体連合会、日本学術振興会、日本弁護士連合会からご後援をいただきお礼を申し上げる。このシンポでは客観的なデータを持って議論したいということで、2025 年 4 月 3 日から 5 月末日までアンケートを行い、7582 の回答があった。結果は後ほど報告したい。

このアンケート結果を 6 月 14 日にホームページに掲載し、そのタイミングで衆議院で選択的夫婦別姓制度について議論がされるということで、衆議院の法務委員会の参考人には大規模アンケート WG 委員長の志牟田先生を推薦し意見陳述をしていただいた他、オンライン記者会見を開き、国内外のメディアで報道され、Nature News でも記事が発信された。その他の主な活動としては、政府各所への要望活動、例えば第 7 期科学技術イノベーション基本計画、男女共同参画基本計画への提言要望活動などを実施。委員長として内閣府の男女共同参画推進連携会議で、国連の地位委員会等について聞くということもあった。

日本学術会議第 2 部会の方から、連絡会の方に、連絡会議に参加して情報交換をという声がかかり、23 期からこの会議に出席もするようになった。各ワーキンググループの活動も活発に行われ、その他、各種シンポなどへの後援、講演も 13 件行った。連絡会への学協会の加盟・承認は今期は無かった。9 月 10 日には各学協会の女性比率調査も行い、結果は近日中にホームページで公開予定となっている。

以上が報告になるが、皆様のご協力ご理解、ご支援に深く感謝申し上げます。

（記録：日本地球惑星科学連合 坂野井和代）

＜ワーキンググループ（WG）活動報告＞

＜提言・要望書 WG：熊谷 日登美 氏＞

合計 7 回開催、第 7 期科学技術イノベーション基本計画に反映されるような要望活動を行うということで WG メンバーで議論し、総合科学技術イノベーション会議関連の方を中心に合計 6 箇所に要望を提出した。主に、以下の項目について説明し要望を行った。要望スライドの最終版はホームページに掲載しているのでそれで詳細をご確認いただきたい。

1. 女子学生の割合に比べて新規採用の女性研究者割合が低いということ。
2. 全分野で職階が上がるほど女性の割合が低下すること。
3. 女性は研究職を継続しにくいいわゆるパイプ漏れの現象が起きていること。
4. 任期職の方々は男女問わず大変な思いをしているが、特に女性の方が不利益を被りやすいこと。不安定な雇用が配偶者の有無や子供の有無・数に影響していること。
5. ジェンダー統計データが不十分で現状や経年変化が把握できないこと。

＜ホームページ検討 WG：裏出令子 氏＞

ホームページ検討ワーキンググループからは、2021 年 1 月にホームページに公開した無意識のバイアスコーナーに掲載されている内容と第 23 期の活動を併せて紹介する。無意識のバイアスコーナーには、大学等の研修で利用できるリーフレット、動画、用語の解説および各種資料のリストであるライブラリーなど、様々なコンテンツが掲載されているので、ぜひ利用していただきたい。これらのコンテンツは連絡会会員だけでなく、幅広くからアクセスがあり、利用されている。また無意識のバイアスについての講演活動もこれまでに 41 件行っており、その資料および代表的な Q&A も閲覧できるようになっている。その他、ホームページに未掲載だった重要な資料（連絡会が設立された際の男女共同参画学協会連絡会アピール文、および創立記念集会、1 周年記念シンポジウム、2 周年記念シンポジウムの各報告書）を掲載した。資料をご提供いただいた先生と応用物理学会に感謝を申し上げる。最後に、ホームページ検討 WG と提言・要望書 WG の連名で発表したポスターを紹介する。女性優遇特別措置いわゆるポジティブ・アクションに対する典型的な反対意見の妥当性に対する反証を統計データなどで示しており、ご確認・ご利用いただきたい。

<大規模アンケート WG：志牟田美佐 氏>

科学技術系専門職の男女共同参画実態調査、いわゆる大規模アンケートは、2003 年からこれまでに 5 回実施されていて、のべ約 8 万 5000 人の科学者から回答をいただいている。第 6 回の大規模アンケートを 2026 年 10 月に予定しており、WG で設問の検討をしている。

大規模アンケートの目的は科学者の実態を明らかにし、そこから課題を抽出すること。収集するデータには性別や所属などの基本情報に加え 4 つの重要事項目、そして自由記述も含まれている。

このアンケートは国の基本計画が 5 年ごとに改定されるタイミングに合わせて 4 年から 5 年ごとに実施。設問内容はほとんど変えずに行うため、定点調査として実態や意識の変化、そして働き方の推移、また施策の影響などを継続的に追うことができる。得られたデータは提言要望の活動につながる。

第 6 回調査では女性科学者の研究支援策の効果や状況の変化を把握するために、定点調査を維持しつつ以下の 3 つの観点をより浮き彫りにする設問へと改良するという事になった。

1. 雇い止めやハラスメントの実態とその結果
2. 女性研究者支援の効果、特にキャリア形成や昇進への影響
3. 企業における課題

この企業に関する項目は近年、企業に所属する学協会会員が増えていることへの対応として新たに強化するものとなる。

2026 年 5 月までに設問や選択肢の案を確定し、正式加盟学協会に審議を依頼する予定。その後、各学協会の意見を反映させてアンケートを完成させ、来年のシンポジウム開催に合わせて第 6 回大規模アンケートを実施する予定となっている。

最後にワーキングの立ち上げより多大なご尽力をいただきました日本建築学会の寺田浩様が 2025 年 6 月にご逝去されました。寺田様のご功績に深く感謝申し上げるとともに心よりご冥福をお祈りいたします。

<女子中高生理系進路選択支援 WG：森義仁 氏>

いわゆる「夏の学校」をやっている WG。実行委員会を連絡会の外に作って「夏の学校」は 2005 年からやっており、夏の学校が終わった時に発行される「タイムズ」や活動報告書を発行していますので、後ほどお読みいただきたい。この場をかりて、今年度のスタッフ登録を 286 名していただき、感謝申し上げます。2005 年から女性研究者の裾野を広げるということで始まり、現在は、この学校運営のために法人を作り活動を継続している。関西にも同様の活動（「春の学校」）をしている法人がある。法人の立ち上げ当初のメンバーがこの連絡会にいたことには本当に感謝申し上げます。

<運営検討WG：今井桂子 氏>

本来であれば前 WG 委員長の寺田先生から報告があるはずであったがご逝去されたため、交代した委員長が報告を行う。経緯については資料集をご確認いただきたい。2025 年 3 月に規定の改定と、それから幹事学協会をどうやって選んでいくかというルール付けをしたいという 2 つの提案を行った。

その後 8 月に改めて WG で議論を行い、今後は幹事学協会ではなく役員選出学協会という名前し、理事と運営委員長、副委員長を選ぶ。それとは別に、総務委員会という名前で事務局に対応する実務を担う会員の方たちの集団を選んでいただく、そういう体制にしたいと考えている。任期は総会から総会までとし、新しい規定に関してはホームページ上の規定の差し替えも行った。ただし会計年度はこれまでと同様に 11 月 1 日からシンポジウムが終わる 10 月 31 日までとした。

これからこの連絡会が継続的にずっと、きちんとした形で運営を続けていくためには、委員長を選ぶだけでなく、事務局として総務委員を選び事務局をきちんと継続していくことが必要だと思っている。それには正式加盟学会の皆様のご協力が必要です。

なお、今までも幹事学協会を選ぶということはとても皆さん苦勞されてきている。次どこに引き受けていただくのか、引き受けていただくにあたってルールをきちんとしてくださいというような意見もあった。また、次いつ回ってくるのかという不安など、いろんなご意見があることから、現在、正式加盟学協会のご意向を伺うアンケートを実施しているので、団体としての意向について回答をお願いしたい。今後もいろいろな話合いを続けていきたい。

(記録：日本地球惑星科学連合 坂野井和代)

選択的夫婦別姓に関するアンケートの結果報告 <集計結果>

佐藤 宣子 氏

第 23 期男女共同参画学協会連絡会委員長

4月3日から5月31日までアンケートを実施、7582名の回答を得た。内訳が男性5094、女性2344、性別を回答しない127、その他17。女性は法律婚をして改姓して通称旧姓利用があり非常に多いことに對し、男性は法律婚で改姓なしが多い。法律婚をした中で男性で通称使用の方は4.6%である意味非常にマイノリティの方ということが分かる。改姓をした人を100%にすると、これは属性関係なく研究者・技術者として仕事を続けていく上で、女性78.6%、男性74.2%が通称旧姓使用をしている。

今回シンポジウムを行うにあたって「研究者と技術者の」ということを掲げており、所属別に少し見てみたいと思い新たに分析を加えた。全体で回答者の6割近くは大学・高専等に所属。国公立研究機関で13%、企業、いわゆる技術者の方が15%になる。これを男女別に見ると、女性の方が大学・高専の比率が若干高く、企業の方が低いということはあるが、性別でそれほど変わらない。企業の特徴としては、通称使用をせずに結婚した後名前を変えて活動しているという方が国公立機関よりも高い。婚姻経験がない人が、女性の大学・高専等で高い。

改姓、通称旧姓利用の実態については、15項目挙げた中で1つでもトラブルを選択した率は全体で78.3%。男女別に見ると、女性が82.4%、男性が52.6%。この違いはどこにあるのかというのを考えてみると、男性の場合はかなり覚悟を持って旧姓使用をしているということもあると想像した。

トラブルで1番多いのが戸籍姓と通称の使い分けについての迷いや煩雑さなどの負担感。2番目が改正・通称使用による事務担当者の負担への申し訳なさ、それからパスポートと航空券の記載名に関する手間やトラブル、研究や学会参加についての事務手続きに関するトラブル。男女差が少ない、男性の旧姓使用の方も、強く感じているトラブルとしては、現地ホテルや会議会場などでの本人確認に関する手間やトラブル、それから、ビザの申請に関する手続きという実態になった。

事実婚については、全体のうち3.5%。女性4.9%、男性が2.7%なので、女性が事実婚を選んでいることが多いということ、一般社会では男性が大体2%程度という風に言われているので、それに比べると男性研究者・技術者の方が事実婚を選んでいる比率が高いという風に言える。

特に年齢別に見ると、女性の50代・60代の方が10%以上事実婚を選択している。1990年代に選択的夫婦別姓の議論が盛り上がった時に法律が変わるのではないかということを期待して事実婚を選択したそういった年代層であり事実婚比率が高いのではないか。

最後に選択的夫婦別姓制度への賛否については、全体で 67%の方が賛成。特に女性 83%が賛成となっている。

(記録：日本地球惑星科学連合 坂野井和代)

選択的夫婦別姓に関するアンケートの結果報告 <自由記載の分析>

高山範理 氏

第 23 期男女共同参画学協会連絡会副委員長

選択的夫婦別姓に関するアンケート調査では、7,582 名から回答を得たが、その中の約 2,500 名分の自由記述を AI の力を活用して分析した。賛成率は全体の約 3 分の 2 で、年長者ほど、また女性の方が支持傾向が高く、事実婚の方も賛成傾向が強いことが明らかになった。

自由記述の分析では、賛成意見を 5 つのグループに分類した。第一に、姓変更による実務的影響として、旧姓使用の手続きが難しく、各種手続きの煩雑さが大きな負担となっている点が挙げられた。第二に、世代間の問題として、選択的夫婦別姓を期待して結婚を延期したの実現せず、結局女性が改姓するのが当たり前という空気があり、自分の世代でこの前時代的な感覚を解消するために制度導入が必要だという意見があった。第三に、同姓化することで生活のあらゆる場面で支障が出る点、第四に研究者の実績的な紐付けや本人確認で大きな障害となる点、第五に事実婚では相続や医療の手続き、住宅ローンの共同申請ができないという問題が指摘された。

一方、反対意見も 3 つのグループに分類された。運用の拡大や使い分けで対応できるのではないかという意見、子どもの姓や親子関係での混乱を懸念する意見、そして社会の根幹に大きなインパクトが起きると心配する意見である。

キーワードの頻度分析では、「不利益・困難」が最多の 886 件、「手続き・事務」719 件、「アイデンティティ」377 件、「国際活動」200 件という結果となった。

「不利益・困難」の具体的内容として、学術実績や論文名義の連続性が損なわれる問題が深刻で、文部科学大臣表彰の若手科学者賞という栄誉ある賞の賞状でさえ旧姓が許されなかった事例が報告された。また、職場システムの ID、メール等の変更負担が大きく、変更しないと昇給等に影響するというプレッシャーもある。郵便物の配送では、旧姓と新姓の混在により郵便局で勝手に配達が保留されたり、職場からの郵便物が返送される事例も報告された。さらに、通称使用により職場とプライベートの境界が曖昧になり、プライバシーが侵害されてしまうという問題も指摘された。

「手続き・事務」に関しては、研究業績の継続性が損なわれ、公的証明書での氏名表記の問題、通称と戸籍名の使い分けによる混乱、そして海外での研究活動における困難が報告された。

「アイデンティティ」の問題では、改姓により検索や評価で過去の業績と現在がつながらなくなり、研究者としての継続的なアイデンティティが損なわれる。旧姓使用による違和感や自分らしさが削がれるという感覚、職場での本人確認による存在の否定感、そして事実婚選択による社会制度上の不利益や周囲の誤解により、正規の婚姻経験者でない感覚が生じるといった深刻な問題が浮き彫りになった。これらが最終的に職業的アイデンティティへの深刻な影響につながっている。

「国際活動」では、パスポートと搭乗券の氏名不一致によるトラブル、ビザ申請時の説明負担、学術雑誌投稿システムのアカウント分断、海外共同研究者による本人確認の困難、ローマ字表記の統一困難など、個人のパフォーマンスだけでなく、アカデミア全体としての国際競争力への深刻な影響が指摘された。

事実婚を選択する理由としては、改姓を避けるために事実婚を選択するという回答が多く、仕事をする上で不利だからという理由が大きい。旧姓使用制度が広がる一方で、その制度とのフリクション(摩擦)があることで事実婚を選択する人が一定数いることが明らかになった。

総括として、選択的夫婦別姓は全世代・男女問わず大幅に賛成されており、研究者の職業的利益に絶対的に影響する問題である。婚姻姓名変更による通称使用の負担、アイデンティティの問題、そして実務的に研究活動を阻害する要因があることが明確になった。自由記述には「スタンス抜きで一つしかありません。この選択制度に、早くしてほしい」という切実な声が寄せられ、特に若手研究者が制度化を強く希望している。一方で、研究評価システムの改善や支援体制の強化で対応できるのではないかという反対意見もあった。

(記録：日本地球惑星科学連合 坂野井和代 ・ 日本森林学会 高山範理)

講演・登壇者紹介

【午後の部】

「研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度」

ご来賓挨拶

前内閣府科学技術・イノベーション推進事務局長 松尾泰樹 氏

基調講演

弁護士 榊原富士子 氏

パネリスト

榊原富士子 氏（弁護士）

加反真帆 氏（九州大学大学院農学研究院 日本学術振興会特別研究員）

吉澤和子 氏（国立研究開発法人 産業技術総研究所 特別研究員）

飯島玲子 氏（パシフィックコンサルタンツ株式会社）

沖野郷子 氏（東京大学大気海洋研究所 教授 ）

田中浩 氏（国際緑化推進センター技術顧問／森林研究・整備機構 森林総合研究所
フェロー）

幹事学協会からの挨拶

佐藤宣子 氏（男女共同参画学協会連絡会第23期運営委員会委員長）

次期幹事学協会からの挨拶

坂内健一 氏（日本数学会）

来賓挨拶

松尾 泰樹 氏

内閣官房政策参与、前内閣府科学技術・イノベーション推進事務局長

ご紹介頂きました松尾です。第23回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムの開催、おめでとうございます。正木会長、佐藤代表理事、太田先生始め事務局の方々に敬意を表します。

私自身、昨年まで3年間、科学技術・イノベーション事務局長として、また15年以上前には文科省人材政策課長として、女性研究者支援をしてきました。女性研究者の数と割合は着実に増加傾向にあります。ただしまだまだ世界水準から言えば劣後にあります。2023年時点で全体では18.3%、大学等で28.9%ではありますが、企業では12%。特に、上位職はまだまだ十分では無い状況にあります。内閣府、文科省、そして大学独自で様々な女性研究者が行われていますが、国としても引き続きしっかりと支援・応援していければと思います。

私自身としては、男女共同参画は当然のことではありますが、老若男女、障がいのある方、外国人、すべての方々が、それぞれの能力と努力により、活躍できる社会。そんなインクルーシブな社会が望ましいと思います。日本の抱える大きな課題のひとつは、人口問題と高齢化です。男女に限らず、全ての方々がそれぞれの場で活躍できる社会に向け、本学協会、シンポジウムが大いに貢献されることを期待します。

丁度、来年4月から第7期科学技術・イノベーション基本計画が始まり、そのための議論が行われています。そこにも、数値目標、評価の在り方、支援の在り方などが議論されています。しっかりと盛り込めるよう、学協会としても、発信頂けると有難いと思います。

加えて、10年に1度の学習指導要領改訂に向けても議論が行われています。そこに対してもしっかりと発信頂ければと思います。

本日は、選択的夫婦別姓の問題について議論されると伺っております。研究等の現場におられ、その現状を肌で感じておられることを、データと実感を持って、冷静にご議論頂ければと思います。

最後になりますが、本日のシンポジウムで有意義な議論が行われ、更に学協会が発展されること、またお集りの皆様の研究、お仕事が順調に進むことを祈念して、私の挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございます。

主旨説明

佐藤 宣子 氏

連絡会第 23 期運営委員会委員長

一般社団法人男女共同参画学協会連絡会は、これまで毎年の提言・要望活動を通じて、選択的夫婦別姓制度の早期実現を訴えてまいりました。研究者にとって氏名はその業績を示す重要な「看板」であり、結婚による改姓や通称（旧姓）使用が研究活動、職場内での認知、国際的な活動において不利益や制約となっており、とりわけ女性研究者への影響が大きいという現状があります。にもかかわらず、制度的改善は長年にわたり放置されてきました。近年では国連女性差別撤廃委員会が 2024 年 10 月に法改正を勧告したことに加え、経済団体・労働団体からも導入の声が上がり、2025 年には 28 年ぶりに国会で本制度に関する質疑が行われるなど、状況に変化が見られています。

本会はこのたび、選択的夫婦別姓制度に関する理系分野の研究者・技術者の実態把握を目的としたアンケート調査（回答数 7,582 名）を実施し、その結果をもとに、衆議院法務委員会では参考人による意見陳述を行いました。現行制度において現場の研究者・技術者が直面する課題を社会に共有・発信するとともに、制度的課題への理解を広めることを目的に、「研究者・技術者にとっての選択的夫婦別姓制度」をテーマとしたシンポジウムを開催します。シンポジウムでは調査結果の報告およびパネルディスカッションを通じて、次世代の研究者や技術者が性別にかかわらずその個性と能力を十分に発揮できる研究環境の整備に向けた議論の場とすることを目指します。

（シンポジウム 案内文より転載）

基調講演

「選択的夫婦別姓制度の実現に向けて－歴史と論点」

榊原 富士子 氏

夫婦別姓訴訟弁護団弁護士

講演スライド：https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2025/251011keynote_lecture_v2.pdf

[概要] 戦後からの議論の経緯として、1988 年の原告関口礼子氏による通称使用訴訟などの歴史的背景や最近の世論調査結果を紹介した。また、通称使用拡大の現状と限界を説明するために、旧姓の通称法案とは何であるか、またその問題点について論じた。そして国際的動向を紹介したのちに、アイデンティティと人格権法的な根拠をめぐる法的な根拠を述べ、講演を締め括った。

(記録：日本数学会 高津飛鳥)

話題提供

パネル討論に先立ち、パネリストおよびファシリテーターから話題提供が行われた。

講演スライド：https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2025/251011panelists.pdf

話題提供 1：「通称使用を巡る手続き上の負担とそれに伴う精神的負担：海外調査と成果発信の両側面から」

加反 真帆 氏（九州大学農学研究院・日本学術振興会特別研究員）

〔概要〕海外調査、とくにインドネシアでのフィールドワークの経験をもとに、海外調査における通称使用の困難さおよび研究活動への影響について紹介した。

話題提供 2：「「通称利用で大丈夫」は本当？」

吉澤 和子 氏（（国研）産業技術総合研究所・特別研究員）

〔概要〕IC チップ未対応などのパスポートの併記問題を原因とする海外留学・研究での具体的トラブル事例や、通称名利用による人事手続きでの困難さについて紹介した。

話題提供 3：「技術者における夫婦別姓の課題」

飯島 玲子 氏（パンフィックコンサルタンツ株式会社）

〔概要〕旧姓併記に関する技術士制度での現状や経済界での対応状況を述べた後、自身が抱えている姓変更によるアイデンティティの問題を説明した。

話題提供 4：「旧姓併記の生ぬるさ」

沖野 郷子 氏（東京大学大気海洋研究所・教授）

〔概要〕海外送金等での困難さやシステム対応の不備をはじめとする、通称名使用による例として、システム対応の不備があることを紹介した。

話題提供 5：「男性事実婚研究者の生活と意見-2.7%のマイノリティーとして-」

田中 浩 氏（国際緑化推進センター・技術顧問／（国研）森林研究・整備機構森林総合研究所・フェロー）

〔概要〕自身の事実婚経験に基づき、親子で姓が異なることには問題を感じなかった一方で、法的補償がないことに対する不安が生じることを紹介した。

（記録：日本数学会 高津飛鳥）

パネル討論

パネリスト：榊原富士子氏、加反真帆氏、吉澤和子氏、飯島玲子氏、沖野郷子氏

ファシリテーター：田中浩氏

〔概要〕 パネル討論は、話題提供者の五名に講演者の榊原富士子氏を加えたメンバーで行われた。性別から見ると男性一名・女性五名、職業では研究者四名（若手二名・テニユア二名）・弁護士一名・技術者一名というように、メンバーのバックグラウンドは多様である。旧姓使用や事実婚（またはその両方）に関して自分自身の経験に基づくカラフルなエピソードを交えながら、活発な議論がなされた。

冒頭で榊原氏がシンポジウムの講演の印象について、次の二点をお話しされた。40年近く前に榊原氏が関口さん弁護を行ったときから比べ、大学等の組織で通称使用が広く認められるようになったのは大きな変化であるが、それにより新たなタイプのトラブルが増大しており、苦勞の度合いはあまり変わっていないようである。また、研究者によるアンケートの回答では選択的夫婦別姓への反対意見も冷静かつ論理的ではあるが、姓を変えないと望む人に対しそれを阻止することの理由は聞けなかった。

次に「両親の氏が異なり子供がその一方と異なる氏を持つことは家族の一体感を崩す」という意見について議論がなされた。別姓家族経験者の沖野氏、飯島氏、田中氏は、家族の一体感と同姓・別姓は無関係という見解で一致した。子供に「なぜ名前が二つあるのか」と聞かれてドキッとしたが、説明したらすぐに理解してくれたというエピソードも披露された。また、沖野氏からは「別姓制度を採用している他国において家族の一体感が不足または子供への悪影響があるという情報には接していない」という今年3月の予算委員会における国務大臣答弁が紹介された。榊原氏は2022年札幌地裁判決から「家族の一体感とは愛情と尊重から生まれるものであり、同一の氏によってのみ成り立つものではない」という言葉を紹介された。

続いて議論は「通称使用で十分ではないか」という意見の検討に移った。加反氏は、海外出張や国際会議などで通称が通らない場面が多く、特に自動化ゲートやデジタルシステムでは人間を相手にした交渉と違い柔軟な対応が難しい現実を指摘した。吉澤氏は、「制度的な不便だけでなく、戸籍名と異なる名前を使い続けることでアイデンティティが揺らぐ」と述べ、通称使用では解決不可能かつ深刻な問題の存在を提起した。飯島氏は、親が思いを込めて（姓との相性を考慮に入れて）つけてくれた名前を婚姻によって変えざるを

得なかった経験を語り、「家制度の名残がいまだに意識の底に残っているのではないか」と述べた。沖野氏は、通称で30年以上活動してきたことによる疲弊感を語り、「次の世代に同じ苦勞をさせたくない」と訴えた。榊原氏は「氏名の変更が人格の一部を揺るがすほどの負担になる人もいる」と強調し、無理に統一を求める制度の不当さを指摘した。

最後に、「氏を変えたくない人は事実婚を選べばよい」という意見について短い議論がなされた。事実婚では解決できない問題として、親権・医療・国家資格など多方面で法的でないし手続き上の不便に見舞われること、介護・相続・医療同意など将来的なリスクの存在が指摘された。さらに、これらは実体験において法律婚へ移行する強い動機になったことがリアルに語られた。締めくくりとして、パネリストとファシリテーター全員からメッセージが述べられた。その中で、若いパネリストが自ら率先して行動を起こし、自分たちの世代で問題を解決する意欲を述べられたことが印象的であった。

(記録：日本数学会 山崎隆雄)

第 23 期 男女共同参画学協会連絡会 委員長挨拶

佐藤 宣子 氏

第 23 期男女共同参画学協会連絡会委員長

第 23 期の運営委員長・一般社団法人代表理事を務め、この 1 年を振り返りつつ、感想とお世話になった方々へ感謝の言葉を述べさせていただきます。23 期幹事学会を引き受けた日本森林学会では 9 名の対応委員を選出し、事務局を構成して運営してきました。当初は前 22 期の今井桂子先生と中口悦史先生にずいぶん助けていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

この 1 年は、大規模アンケートの結果や統計データを基に、関係団体との連携および第 7 次科学技術・イノベーション基本計画に関連する内閣府や文部科学省の部署や委員に対する提言・要望活動の時期でした。要望・提言書ワーキングの先生方とのオンラインでの打ち合わせと面談において、真摯な話し合いが行われたことが特に印象に残っています。これまでの WG の先生方や学協会連絡会の先輩方のデータ収集と資料作成の努力とともに、政府のジェンダー統計の不備などの課題も感じたところです。

また、28 年ぶりに国会で選択的夫婦別姓制度が議論される時期とも重なりましたので、23 回シンポジウムでそれをテーマに取り上げることを決定し、取り組んできました。当初、通称（旧姓）使用している女性研究者は増加しているが、本当に困っている人はいるのだろうか？という運営委員の中で議論があり、現状を把握するためにアンケートを実施することになりました。その結果、7,582 名から回答が寄せられ、自由記入欄には切実な声があふれていました。国会審議前に発表したところ、予想を遥かに超えてメディアに取り上げられ、衆議院の法務委員会において参考人推薦の依頼がありました。急な依頼に対して、意見陳述をしていただいた大規模アンケート WG 委員長の志牟田美佐先生には深く御礼申し上げます。

（シンポジウム 資料集より転載）

第 24 期 男女共同参画学協会連絡会 幹事学会挨拶

石毛 和弘 氏

一般社団法人 日本数学会 理事長

男女共同参画学協会連絡会の次期幹事学会をお引き受けすることになりました、日本数学会理事長の石毛和弘と申します。

日本数学会は、研究者がその能力を十分に発揮し、数学研究をより一層発展させるためには、多様性と包摂性の推進が欠かせないとの認識に立ち、2022年に「ダイバーシティ・インクルージョン基本方針」を策定いたしました。この方針は、お互いを対等な存在として尊重し合い、公平性と多様性を自然に受け入れる倫理的な環境を育むことを目的としています。数学は本来、固定観念に縛られず、自由な発想と論理によって新しい知を切り拓く学問であり、この理念は数学研究の精神そのものと深く響き合うものです。

一方、人文科学・社会科学・自然科学を含むあらゆる分野において、日本の女性研究者比率の低さは依然として大きな課題であり、日本数学会にとっても例外ではありません。これは長年にわたり取り組んできた重要課題であり、今後も不断に改善へ向けた努力を続けていかなければならないと考えております。

次期幹事学会としての責任を担うにあたり、これまで積み重ねられてきた男女共同参画推進の取り組みと成果を大切に、多様性と包摂性の理念に基づき、さらなる発展へとつなげてまいり所存です。研究者一人ひとりが安心して学問に専念し、その能力と個性を最大限に発揮できる社会の実現を目指し、今後も誠心誠意努めてまいります。

関係の皆さまには、あたたかいご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

(シンポジウム 資料集より転載)

第 24 期 男女共同参画学協会連絡会 委員長挨拶

坂内 健一 氏

第 24 期男女共同参画学協会連絡会委員長

次期の男女共同参画学協会連絡会の幹事学会（役員選出学会）をお引き受けしました、日本数学会の坂内健一と申します。母・悦子が数学者であり、妻・博子が脳神経科学の研究者であることから、以前よりダイバーシティには関心を持っていました。2019 年の秋に駐日欧州連合代表部で開催された写真展「Women of Mathematics throughout Europe: A Gallery of Portraits」に関わったことをきっかけとして、2020 年度から日本数学会の男女共同参画社会推進委員会の委員となり、2022 年度～2023 年度の 2 年間、日本数学会の男女共同参画社会推進委員会の委員長を務めました。

私自身、男女共同参画学協会連絡会の活動についてまだ学んでいる段階ですが、日本の学術の男女共同参画推進の原動力となり、性別に関わらず幅広い属性の研究者の教育研究環境の改善に貢献してきたと認識しています。日本の学術界は依然として大きな課題を抱えています。幹事学会としての任期を通じて、これまでの経験を活かし、連絡会の皆さまと力を合わせながら、社会・文化・経済的要因などによって生じる不公正に想像力を働かせて、ひとりひとりが本来持ち合わせている能力を抑圧なく存分に発揮できる学術共同体の実現に向けて尽力したいと考えています。どうぞご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

（シンポジウム 資料集より転載）

ポスター発表参加一覧

加盟学協会（学協会ID順）

003	公益社団法人	高分子学会	032	生態工学会・一般社団法人	日本宇宙生物科学会
006	公益社団法人	日本化学会	036	一般社団法人	日本建築学会
007	一般社団法人	日本原子力学会	037	種生物学会	
009	一般社団法人	日本女性科学者の会	044	公益社団法人	日本技術士会
010	一般社団法人	日本植物生理学会	045	公益社団法人	日本植物学会
011	一般社団法人	日本数学会	050	日本中性子学会	
013	一般社団法人	日本生態学会	056	一般社団法人	日本応用数理学会
014	一般社団法人	日本生物物理学会	059	一般社団法人	日本内分泌学会
018	公益社団法人	日本動物学会	066	公益社団法人	日本栄養・食糧学会
021	一般社団法人	日本物理学会	125	公益社団法人	日本表面真空学会
023	一般社団法人	日本森林学会	135	日本組織細胞化学会	
024	地球電磁気・地球惑星圏学会		137	公益社団法人	応用物理学会
030	公益社団法人	日本地球惑星科学連合			

ワーキンググループ

大規模アンケートWG

提言・要望書WG・ホームページ検討WG連名

提言・要望書WG

大学等

国立大学法人 東北大学

午前の部写真 1



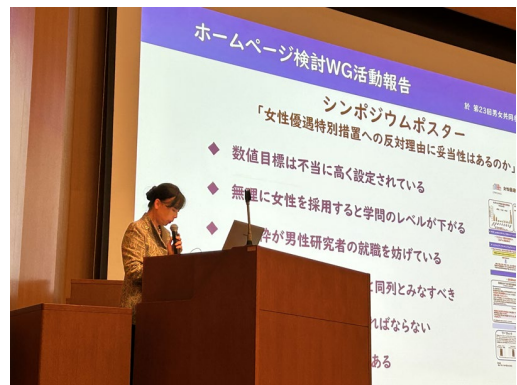
幹事学会挨拶 正木 隆 氏
(一般社団法人日本森林学会会長)



歓迎の挨拶 渡辺 美代子 氏
(日本大学 業務執行理事)



提言・要望WG
熊谷日登美 委員長



ホームページ検討WG
裏出 令子 委員長



大規模アンケートWG
志牟田 美佐 委員長

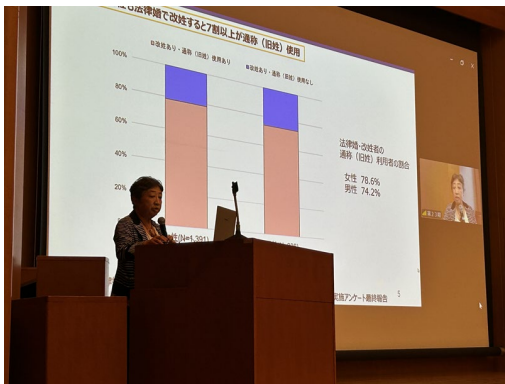


女子中高生理系進路選択支援WG
森 義仁 委員長

午前の部写真 2



運営検討WG 今井 桂子 委員長



選択的夫婦別姓に関するアンケート結果報告
第23期男女共同参画学協会連絡会代表理事
佐藤 宣子 氏



選択的夫婦別姓に関するアンケート結果報告
第23期男女共同参画学協会連絡会理事
高山 範理 氏 佐藤 宣子 氏

午後の部写真 1



来賓ご挨拶内閣官房政策参与、前内閣府科学技術・イノベーション推進事務局長
松尾 泰樹 氏



基調講演
弁護士 榎原 富士子 氏



話題提供1 加反 真帆 氏
(九州大学大学院農学研究院
日本学術振興会特別研究員 (PD))



話題提供2 吉澤 和子氏
(国立研究開発法人産業技術総合研究所
地質調査総合センター特別研究員)



話題提供3 飯島 玲子氏
(パシフィックコンサルタンツ株式会社)



話題提供4 沖野 郷子氏
(東京大学大気海洋研究所)

午後の部写真2



話題提供5 田中 浩 氏
(国際緑化推進センター技術顧問／
森林研究・整備機構 森林総合研究所フェロー)



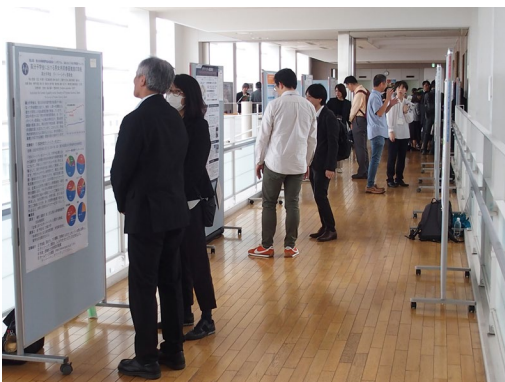
パネル討論



幹事学会からの挨拶
佐藤 宣子 氏
(一般社団法人 日本森林学会)



次期幹事学会からの挨拶
坂内 健一 氏
(一般社団法人 日本数学会)



ポスターセッション

【担当】

第 23 期幹事学会 一般社団法人 日本森林学会

委員長 佐藤 宣子（九州大学大学院農学研究院 教授）

副委員長 久保田 多余子（森林研究・整備機構 森林総合研究所 チーム長）

副委員長 高山 範理（森林研究・整備機構 森林総合研究所 チーム長）

委員 太田 祐子（日本大学生物資源科学部 教授）

斎藤 哲（森林研究・整備機構 森林総合研究所北海道支所 支所長）

村上 拓彦（新潟大学農学部 教授）

木村 恵（秋田県立大学生物資源科学部 准教授）

宮下 彩奈（森林研究・整備機構 森林総合研究所 主任研究員）

東 若菜（神戸大学農学研究科 准教授）

サポート 上村 真由子（日本大学森林学科 准教授）

第 24 期幹事学会 一般社団法人 日本数学会

委員長（予定）坂内 健一（慶應義塾大学理工学部 教授）

【記録】

午前の部 公益社団法人 日本地球惑星科学連合

坂野井 和代（駒沢大学 総合教育研究部 教授）

午後の部 一般社団法人 日本数学会

高津 飛鳥（東京大学大学院数理科学研究科 教授）

山崎 隆雄（中央大学理工学部 教授）

第 23 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムアンケート結果

【日時】 2025 年 10 月 11 日（土） 10:00～16:30

【形式】 日本大学生物資源科学部湘南キャンパス 大講義室&オンライン開催

参加者：現地参加 75 人、オンライン参加 65 人、合計 140 人

アンケート回答者数：69 人

アンケートへのご協力いただきありがとうございました。頂いた意見を今後の活動に生かしてまいります。また、アンケートフォームから資料集へのリンクが切れており、「資料集を閲覧できなかった」というご意見を多数いただきました。お詫びいたします。

1) 属性

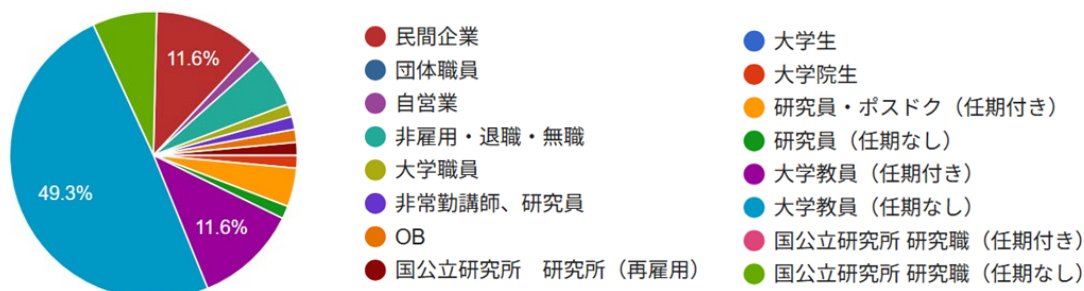
回答者の身分は、大学教員（任期なし）が最も多く、49.3%であった。ついで大学教員（任期付き）と民間企業が共に 11.6%、国立研究所研究職（任期なし）が 7.2%、非雇用・退職・無職が 5.8%、研究員・ポスドク（任期付き）が 4.3%であった。その他として、OB、研究員（任期なし）、国公立研究所研究所（再雇用）、自営業、大学院生、大学職員および非常勤講師からの回答があり、10.1%を占めていた。

年齢は 40 代が最も多く 36.2%、ついで 50 代が 29.0%、60 代が 21.7%、70 歳以上と 30 代が共に 5.8%、20 代が 1.4%であった。

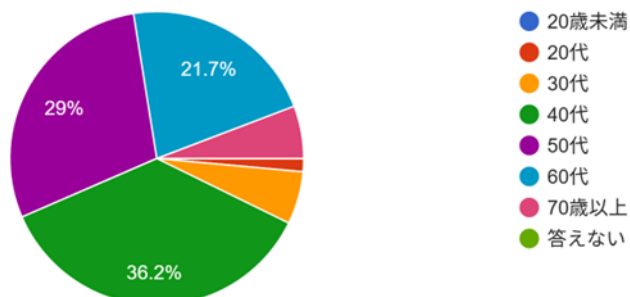
性別は女性が 62.3%、男性 37.75%で、その他・答えないは 0 人であった。

あなたについて

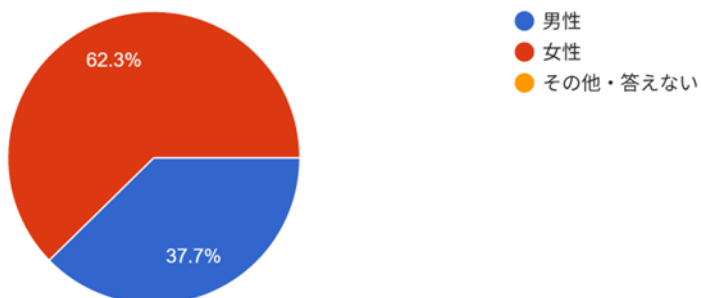
69 件の回答



年齢
69 件の回答



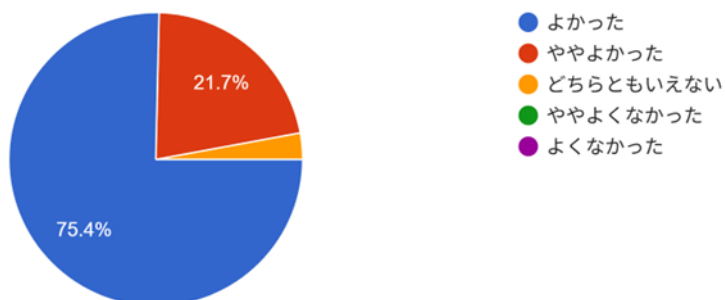
性別
69 件の回答



2) シンポジウム全体について

「よかったが」が 75.4%「ややよかった」は 21.7%、両者をあわせると 97.1%となり、良い評価であった。「どちらともいえない」が 2.9%、「ややよくなかった」および「よくなかった」はいずれも 0%であった。

シンポジウム全体について
69 件の回答



3) ポスター発表について

ポスター発表について感想や意見を伺ったところ、28 名の方から回答がありました。主な回答は次の通りです。

- 各学協会が、それぞれ取り組みを行っているのが良く分かった。
- 各学協会の考え方の違いが見えて興味深かった
- 各機関の取り組みがわかり、大変参考になった
- 高分子学会のポスター発表で女性会員数と女性学生数の推移の情報が興味深かった。
- 夏学が盛り上がっていることが分かった
- 自分たちの活動報告ができて良かった。
- 他学会との情報共有ができて良かった。
- 積極的是正措置への反対理由の妥当性ポスターはとてもありがたかった。
- 女性限定公募への批判に対する反論が参考になった
- 連絡会のポスターが要領よくまとめられ、資料としての価値も高いと思った。
- オンラインのため拝見できなかった。
- お昼休みと重なり見る時間が短かった。
- ポスターを HP で閲覧できると良い。

4) 最も関心の高かった内容

42.0%の人が榊原富士子氏の基調講演を最も関心が高かったと回答した。それに続いて、「選択的夫婦別姓に関するアンケート結果報告」(20.3%)、「パネル討論」(13.3%) への関心が高く、「パネリスト紹介 加反真帆氏」、「パネリスト紹介 飯島玲子氏」、「パネリスト紹介 田中浩氏」が 4.3%、「パネリスト紹介 吉澤和子氏」、「パネリスト紹介 沖野郷子氏」が 1.4%と続いた。

5) 資料集について

15 名の方からご回答をいただきました。主な回答は次の通りです。

- 発表スライド（やその概要版）も当日アクセス出来ると良い。
- まとめとして利用しやすい。当日発表された詳細な資料へのリンクもあるとありがたい。
- HP に様々な資料があり活用させていただいているが、どの情報がどこにあるかわかりにくい。詳細資料へのアクセスが容易にできるようになっているとありがたい。
- よくまとまっており、他学会の情報を知ることができて有益。
- 各学会のご報告が大変興味深く、参加する学会でもミーティング等のアイデアを借用

することがある。

- 各学協会様の取組はたいへん参考になる。
- ポスター原稿の掲載もできると良い
- 英文アブストラクトは必要でしょうか？
- 充実した内容でした

6) シンポジウム全体についてのご感想・ご意見

39 名の方からご回答をいただきました。主な回答は以下の通りです。

- オンラインだと、パネルディスカッションの時など、聞き取りづらい時があった
- 会場は綺麗で学食も利用でき、大変良かった。
- 休日に都内から離れた場所で現地参加するのは家庭の事情で大変な人もいるので、オンライン参加主体にしてもいいと思った。
- 録画配信も検討してほしい。
- 通称使用の不都合が解消されたとしても、「強制的夫婦同姓制度」により研究者としてのアイデンティティを傷つけられる方が多そうと感じた。
- こんなにたくさんの事例があるのに、議論が進まない。改めて、自分も声を上げたいと思った。
- 最近、選択制夫婦別姓の議論が少なくなっているのを、我慢強く訴えていく必要がある。今後とも、話題に載せていくようにして欲しい。
- どの講演もたいへん有意義で、参加して良かった。特に、今年のテーマはこれから、業界としても社会へ発信していくべきものだったと思った。
- パネリストのみなさんの、夫婦別姓を推し進めたいという熱量にびっくりした。いろんな意見があると思うので、中立に検討できるように、反対の意見や慎重な意見の発表も含めてもよかったのではないかなと思う。
- 夫婦別姓問題について深く知り、考える機会になった。技術士の男女比率格差に驚き、一緒に解決したいと思った。
- 選択制夫婦別姓制度の歴史から様々な年代の研究者の生の声を聴くことができ、大変勉強になった。田中先生の『オフセット対応ではダメ』という話が私には一番印象に残った。ともすれば「運用で解決可能」の方向に進みがちな話題だが、それは根本からして適切でないということで、今後、当該制度を考えていくうえで私の指針になると思う。
- 榊原先生のご講演は大変勉強になった。やはり、科学者として、教育者として、今知りたいのは専門家による事実の説明である。話題提供して下さった先生方のお話にも感銘を受けた。
- 私たちも学会会員を対象に毎年セミナーを企画・開催している、テーマや登壇者を検

討する良い参考になった。

- 「選択的夫婦別姓」という、男女参画の根幹でありかつ先を見据えたテーマ設定に驚くとともに、変えていこうという連絡会・運営みなさまの意気込みを感じた。
- これまでの歴史や、男性側からの事実婚の例について、大変興味深かった。研究者が改姓する・しないことにまつわる問題も女性の多くが負担していることが可視化され、うなずくことが多かった。パネリストの方がおっしゃっていた、「私もこんなこと思っていたと共有できる場」の重要性に共感した。
- 刺さるテーマでのご開催、ありがとうございました。
- 時機を得た素晴らしい内容であったと思う。
- 自分は男性であるが、自分が妻の姓に改姓する予定である。そういった背景もあり、改姓に伴う諸事情は興味を持って聴講した。少子化が進む中、姓を残すということが難しくならざるを得ないと感じる。考え方を変えなくてはいけない時期に来ているように思う。
- 難しいテーマに正面から取り組み、有意義なアンケートを実施して結果を出していただき、共有いただいたことに感謝する。
- 女性研究者、技術者にとって重要なテーマを取り上げていただき感謝する。次世代に向けて、何かをしようという想いを共有する機会になったと思う。
- 女性研究者・技術者のリアルを聞くことができ良かった。また、NHKなどが提示するアンケートや「子どもが不利益」など歪んだ情報の流布の状況を明言されていたことは大変意義あることだと感じた。この数年とは異なる範疇の素材を大きく扱ったことで、学協会連絡会の意義を再確認できたように感じた。
- 選択的夫婦別姓に反対する意見に対して、相手が納得できるような説明や根拠の示し方を知りたい。
- 選択的夫婦別姓の実現が実に長い間実現できていないことに驚いた。アンケート調査の恣意的サンプリングが隠蔽されていることも驚いた。このような発見や、気づきができるシンポジウムは、貴重だと思った。
- 選択的夫婦別姓の問題点として、子どもの姓が親と異なることで家族の繋がりが無くなることに對し、結婚して姓が変わったからといって親子の繋がりは無くならないという視点は新しい気づきだった。
- 選択的夫婦別姓の歴史、ニーズとその裏にある深刻な問題点の把握、内容をよく吟味する必要性などを改めて痛感した。
- 選択的夫婦別姓法の施行と通称使用の拡充のどちらかを選ぶのではなく、両方を進める必要があることがわかった。
- 大変興味深い内容だった。基調講演で本問題の全体の流れが俯瞰できてよかった。ただ選択させてもらえればいいだけなのに、なぜ法改正が進まないのかは、あらためて疑問に思った。通称使用拡大と、選択的夫婦別姓の問題の論点が混同されているということも、非常にわかりやすく、国会等でも論点を明確にして議論されるべきだと思う。

った。不自由だというだけでなく、アイデンティの問題でもあることを明確にしてほしい。

- 任期付きで旧姓使用の研究者が異動時に直面する課題を改めて認識した。任期付き研究者は女性が多く、改姓後も旧姓を使うケースがほとんどであるといった状況から、選択的夫婦別姓の導入は、これからの世代の為にもますます重要だと思った。
- 手続きが煩雑と平たく言われてしまうとピンと来ていなかったが、事例を知ることによって問題であることがよく理解できた。事例を踏まえて発信していけば、選択的夫婦別姓の必要性をもっとアピールできると思う。
- 歴史、背景、現状について、たいへん勉強になった。会として今後の活動に活かしていただければと思う。
- 連絡会シンポジウムで政治的テーマに正面から取れ組まれて誇らしい。
- 連絡会の活動がよくわかってよかった。

7) 今後のシンポジウムのテーマについてのご提案

15 件のご意見をいただきました。主なご意見は以下の通りです。

- ハラスメントの実態とその対応について
- 義務教育課程の課題（理系科目や英語教育）、卒業後の進路、博士号研究者、海外籍研究者
- 現在の男女共同参画社会の問題洗い出しの再確認
- 若手のキャリアパス
- 「女子枠」「逆差別」「逆逆差別？」の現状と在り方
- 女性科学者技術者が生涯現役ではたき続けるための環境整備
- 女性活躍と DEI のいずれの切り口で活動を進めることが効果的か、それぞれのメリット、デメリットなど検証する機会
- 選択的夫婦別姓をより突っ込んだ内容で
- 東大はなぜ男だらけなのか？に関連し、他の大学の事情について
- 非正規雇用、任期付雇用、雇い止めについて、問題点と今後の解決策について
- 約 20 年に及ぶ運営費交付金の減額による国立大学の研究と教育の変化について

以上

第 23 期男女共同参画学協会シンポジウ報告書

2025 年 11 月 7 日発行
一般社団法人 男女共同参画学協会連絡会
<https://djrenrakukai.org/>

[禁無断転載] 本誌に掲載する著作物を転載または引用する場合には、掲載する刊行物に「第 23 期男女共同参画学協会連絡会シンポジウム報告書」から転載または引用した旨をご付記くださるようお願い申し上げます。

第 23 期 男女共同参画学協会連絡会 事務局



一般社団法人

日本森林学会
The Japanese Forest Society Since 1914